

世界的建築家デイヴィッド・チッパーフィールドの新作に見る、日本における霊園文化の新時代

2017.8.9

イギリスを代表する建築家デイヴィッド・チッパーフィールドの最新作が、日本で竣工した。兵庫県東部に位置する猪名川（いながわ）霊園の新礼拝堂・休憩棟だ。チッパーフィールドへのインタビューとともに、日本における霊園文化の新時代を探る。

イギリスを代表する現代建築家の最新作は、日本の霊園に立つ礼拝堂・休憩棟



[画像のクリックで拡大表示]

建築家デイヴィッド・チップパーフィールド（自らが設計を手掛けた猪名川霊園・礼拝堂にて）。初来日は1985年。トヨタオート京都の「TAKビル」（1990）等々、日本に優れた業績を残してきた。大の親日家としても知られ、また2013年には高松宮殿下記念世界文化賞を受賞している。

新大阪駅から車で北上すること約1時間。大阪府との境にほど近い兵庫県川辺郡に、公益財団法人 墓園普及会が運営する猪名川霊園はある。5月にオープンした礼拝堂・休憩棟の設計を手掛けたのは、サー・デイヴィッド・アラン・チップパーフィールド（以下敬称略）。その名が示す通り、建築界への貢献から2004年に大英帝国勲章（CBE）を授与されたイギリスを代表する現代建築家であり、日本でも数多くの業績を残してきた親日家としても知られる。しかし、霊園施設の設計を第一線で活躍する海外の建築家に託すことは、これまでの日本の常識からすれば非常に稀有な例であることは間違いないだろう。



[画像のクリックで拡大表示]

猪名川霊園・礼拝堂。設計したチップーフィールド曰く「この建物の中で、一番純粹な場」。両側に配された中庭を望む大ガラスと、祭壇上に設置された窓から自然光が入る。

まず解決しなければならなかった課題は、限られた敷地の中に、事務室やビジターラウンジ、法事の後に会食を行うメモリアルルーム、そして宗教を問わずに利用できる礼拝堂を収めるということだった。チップーフィールド本人の言葉を借りれば、「実務的なニーズと精神的なニーズの両立」だ。

はたして、彼の最新作として竣工した猪名川霊園の新施設は、国内にあるどの霊園施設とも異なる様相で、威厳や静謐、癒やしを体現する場となったのだ。



[画像のクリックで拡大表示]

メモリアルルームは、法事後の会食を行うための施設。布に和紙を重ねたカーテンで、部屋を三つに仕切ることができる。

建設地の地形や地元にある素材のみならず、文化や歴史までも徹底して調査することで知られるチップーフィールドだが、北摂山系（ほくせつさんけい）の斜面に広がる猪名川霊園の地形は、デザインの方向性を決定づける重要な要素となったという。

「雛壇（ひなだん）状に広がる霊園の中央を貫く階段が、強烈な軸をなしています。そして、この周辺を山々の景色が囲んでいる。そこで、私たちは気づいたのです。建物はまず、この軸に応えていくものでなくてはならない。そして同時に、山々に呼応していくものにしなければならないということに」

また、新施設の建築場所が霊園の入り口にあることから、門としての機能も果たすものでなくてはならない。こうした建物の立ち位置についての追求が、さらなる次元へと建築家を導いたようだ。

「ここに私たちがつくりたかったのは、建築というよりも“ひとつの場”なのです。門となり、また軸となる階段に人々を導き、霊園の中へと誘う場。つまり平穏さや安らかさを感じ、思索を深めていけるような場所でない

ければならなかったのです」



[画像のクリックで拡大表示]

門の役割も果たす霊園入り口の礼拝堂・休憩棟から、敷地中央を貫く階段を望む。「日本の野山の色合いと質感」を考慮し、精選した種々の山野草や低木を緻密に配した中庭は、レストランやファッションのプロデュースで知られ、『Japan Houses』などの著者として日本建築を海外に紹介してきた岩立マーシャと上村景観設計が手がけた。

その理想を実現するために採られたさまざまな手段のうち、最も重要なことの一つに、建築物全体に使用された素材がある。

「できるだけ一つのマテリアル、一つの材質で全体をつくろうと考え、カラーコンクリートを採用しました。そして、天然素材に見える色を追求したら、このような色合い（薄い赤褐色）に落ち着いたのです。仕上げとしては意図的に生々しさ、粗削りなところを残していくようなつくり方を心がけました」

そして、モダンでありながら周囲の自然と調和し、精神性をも感じさせるような、まるで「一つの岩の塊」のような建築が実現したのである。



[画像のクリックで拡大表示]

北摂山系の山々に囲まれ、雑壇状に広がる猪名川霊園。最下段に建築された新施設は、片流れの屋根の下に、礼拝堂や事務室、メモリアルルームなど全ての施設が収まる。

日本における新たな霊園文化の創出を目指して

日本国内において極めてユニークな試みといえるこのプロジェクトは、公益財団法人 墓園普及会の理事長である大澤秀行の志に、デイヴィッド・チッパーフィールドが賛同したことで始まったという。その志とは、宗教や人種を超えて分かちあえる、祈りの場にふさわしい新施設を建造するというもの。

これは、コンテンポラリーアートのコレクターとしても知られる大澤が、現代における霊園のあり方を模索しながらたどり着いた、スウェーデンにある森の墓地（スコグスシュルコゴデン）に感銘を受けて得た考え方だという。1917年に建設が始まった、首都ストックホルムの郊外に位置するこの共同墓地は、死後に人は森へ還るというスウェーデンの死生観が反映されている。敷地内には自然と調和した霊園建築が配されてお

り、20世紀以降の建築物として初めて1994年に世界遺産に登録されたことでも名高い。

猪名川霊園の礼拝堂・休憩棟の建造に先立ち、公益財団法人 墓園普及会は設立40周年記念事業として、2013年に狭山湖畔霊園に管理休憩棟を、2014年に狭山の森 礼拝堂を建造した。これらの施設は世界的に高い評価を得て、多くの建築賞を受賞してきた。チップーフールドは、「一年のうちの決まった時季にお墓参りをし、日常的にも墓を訪れる」日本の文化にとっても驚かされたというが、そんな私たち日本人の心と、現代の価値観に寄り添った霊園の新しいあり方を示すものとして、公益財団法人 墓園普及会の試みは注目に値するといえるだろう。



[画像のクリックで拡大表示]

公益財団法人 墓園普及会の所有する狭山湖畔霊園（埼玉県）の管理休憩棟。財団設立40周年記念事業として若手建築家を対象にしたコンペを開催、選出された中村拓志（NAP建築設計事務所代表）が設計を手掛けた。Photo : Koji Fujii / Nacasa and Partners inc



[画像のクリックで拡大表示]

狭山湖畔霊園に立つ狭山の森 礼拝堂。中村拓志が設計を手掛けた。2本の柱を互いに立て掛け合う扱首（さす）構造によって、新しい合掌形式を実現。屋根には、手作りによる限界の薄さに挑んだアルミ鋳物を使用されている。2016年にアルカシア建築賞の最高賞「ビルディング・オブ・ザ・イヤー」を受賞した。Photo : Koji Fujii / Nacasa and Partners inc

デイヴィッド・チップパーフィールド

建築家。1953年イギリス、ロンドン生まれ。代表を務めるデイヴィッド・チップパーフィールド・アーキテクトは、ロンドン、ベルリン、ミラノ、上海に事務所を置き、大小施設の内装から公共建築まで幅広く手掛ける。19世紀の歴史的建造物を15年の歳月をかけて再生させた「ノイエス・ムゼウム（新博物館）」修復プロジェクト等々の功績により2004年に大英帝国勲章（CBE）を受章。日本では80年代後半から優れた建築を手がけてきたが、その一方でチップパーフィールド自身もまた日本建築や文化から大きな影響を受けてきたという。

<https://davidchipperfield.com>

Photo : Akihito Yoshida (David Chipperfield) 、 Yuna Yagi Text : Akiko Tomita Edit : Yuka Okada